様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １２ 日現在

機関番号：３４３１４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００１８３

研究課題名（和文）則天武后期の仏教美術に関する研究

研究課題名（英文）Empress Wu and Her Influence over the Buddhist Arts and Culture

研究代表者
大西　磨希子（ONISHI, Makiko）

佛教大学・仏教学部・教授

研究者番号：００４１３９３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、『大雲経疏』と涅槃変相図の調査研究を二つの柱として計画していた。そのうち涅槃変相図については、中国での現地調査が継続できない状況に置かれたため頓挫したが、一方の『大雲経疏』については、大英図書館において敦煌写本S.2658とS.6502を実見調査し、とくに明堂と嵩山封禅の記事に着眼した研究成果をまとめることができた。また、当初の計画には入れていなかった則天武后と棺槨形舎利容器との関係に関して、儀鳳年間に参与した舎利頒布事業も含めて検討し、複数の新知見を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
則天武后が登極にあたって仏教を利用したことは、あまりにも有名である。しかしながら、彼女が仏教美術や仏教文化に与えた影響については、意外にもほとんど明らかにされてこなかった。それに対し、本研究では則天武后の統治が確かに仏教美術や仏教文化に大きな変化をもたらしていたことを、棺槨形舎利容器の創始と普及、弥勒下生変の確立において明確に指摘することができた。また、『大雲経疏』に儒教や道教に関わる記事が多分に含まれることの意味についても検討し、則天武后にとって仏教や、儒教、道教がどのように位置づけられるのかを、具体的に明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：This research project planned to study the Commentary of the Dayunjing and the Pictorial Narratives of Nirvana. Although the on-site research about Pictorial Narratives of Nirvana in Dunhuang and Taiyuan Shanxi could not be completed because of the epidemic, I studied two Dunhuang manuscripts of the Commentary of the Dayunjing S.2658 and S.6502 at the British Library, clarified the reason why this Buddhist commentary contains many issues about the Mingtang Hall and Fengshan Sacrifices at Mount Song, those are originally unrelated to Buddhism. I also studied the influence of Empress Wu over the creation and spread of the sarcophagus-style sarira container along with the relic-distribution held in Yifeng era.

研究分野：仏教美術

キーワード：則天武后　武則天　大雲経疏　棺槨形舎利容器　金棺銀槨　法門寺真身舎利　敦煌壁画　弥勒下生変

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

中国史上、唯一の女性皇帝として君臨した則天武后は、登極に際して仏教を利用し、自身が仏教における未来の救世主たる弥勒仏であり、かつ仏教的理想君主とされる転輪聖王の最上位たる金輪王であると喧伝した。このように則天武后による仏教の利用は広く知られた事実であり、さらに、この則天武后による執政期は、高宗の皇后時代から自身が皇帝として即位した武周期までの約五十年間の長きに及ぶ。したがって、当該期の仏教美術や仏教文化に則天武后が影響を与えなかったとは考え難く、むしろ甚大であった可能性が高い。しかしながら、その実態については、これまでほとんど明らかにされてこなかった。

そのようななか研究代表者は、本研究の申請に先立ち、武周期に倚坐形の弥勒仏像が流行し、弥勒仏の前に七宝を陳設した新たな図相の弥勒下生変が出現すること、また則天武后は革命時のみならず治世を通じて仏教を優遇していたことを明らかにした。これらの研究から見えてきたのは、則天武后による統治が及ぼした影響というものが、弥勒仏に関連する彫刻や絵画だけにとどまらず、他の仏教美術や仏教文化にも広く及んでいた可能性である。そこで、則天武后による統治が当時の宗教芸術に与えた影響とはどのようなものであったのか、さらに視野を広げて検討してみることを目的に、本研究に着手した。

２．研究の目的

本研究の目的は、約半世紀に及ぶ則天武后期の執政期が当該期の仏教美術に与えた影響の具体相や実態を明らかにするところにある。

（１）『大雲経疏』に記された内容と史実との関係を調査し、『大雲経疏』に引用される「讖」が何を指し、どの記載がどの史実に対応するのか、それは何を意図したものなのかを考察することによって、則天武后による仏教利用の実態を明らかにする。

（２）武周期に大きく変容する涅槃変相図を取り上げ、敦煌莫高窟第 332 窟壁画と蒲州大雲寺涅槃変碑像を調査し、武周期の涅槃変相図の特徴を洗い出し、変容の背景を探る。

（３）中国に特有の棺槨形舎利容器は、則天武后期に始まるとされる。その是非を『法苑珠林』の法門寺真身舎利供養をめぐる記事の検討を通じて検証するとともに、高宗の皇后時代に則天武后が主導して実施した儀鳳年間の舎利頒布事業に注目することによって、則天武后が舎利容器の変容と普及に果たした役割を明らかにする。

３．研究の方法

（１）『大雲経疏』については、現存する二点の敦煌写本、すなわち S.2658 と S.6502 を大英図書館において調査し、正確な録文を作成したうえで全体の構成を分析し、出典や史実との関係を含め検討した。とくに、『大雲経疏』が仏教経典の注疏という体裁を取りながら、本来は仏教とまったく関係のない明堂や嵩山封禅の記事を含むのかという点に着目し、その意味するところを考察した。

（２）武周期の涅槃変相図については、本研究の初年度に、予備調査として莫高窟第 332 窟壁画と蒲州大雲寺涅槃変碑像を実見した。とくに蒲州大雲寺涅槃変碑像の予備調査では、先行研究の録文では漏れていた文字が複数あることが判明し、調査を継続することによって、正確な録文を作成することの必要性が確認できた。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の影響により調査の継続が不可能となったため、これについては頓挫せざるを得なくなった。

（３）則天武后期に新たに出現した棺槨形舎利容器について、儀鳳年間の舎利頒布事業や、法門寺真身舎利に関する『集神州三宝感通録』の記事の検討から、その創始と普及の問題を考察した。また、儀鳳年間の舎利頒布事業と『大雲経疏』に記される八百四万舎利塔建立記事との関係についても検討を行った。

（４）儀鳳年間の舎利頒布事業については、史料が少なく、これまでは実態が明らかでなかった。しかし、潞州梵境寺「大唐聖帝感舎利之銘」を丹念に読み込むことによって、舎利頒賜の規模と場、舎利を頒賜したのは誰で、舎利を受け取ったのは誰か、舎利頒賜の時期と諸州府への輸送といった、より詳細な点について検討を加えた。さらに、隋文帝の仁寿年間の舎利塔建立と比較することにより、仏教事業としての特徴がどこにあるのかを考察した。

４．研究成果

（１）敦煌写本『大雲経疏』は、もとの名が『大雲経神皇授記義疏』と推定されるように、仏教

的符讖の書であり、武周革命に利用された。したがって同疏は、則天武后やその取り巻きが革命を実現するにあたって、何を重視し、それらにどのような意味づけをしていたかを知るうえで、またとない好個の材料といえる。興味ぶかいことに、同疏には本来は仏教と関係のない明堂や封禅に関する記述が含まれている。この点に着目することによって、同疏に明堂や封禅の記述を含むのは、これらがいずれも受命の君たることを象徴し、その王権の正統性を裏付ける重大事であったためであることが明らかとなった。さらに、則天武后が即位後、明堂の運用や封禅の実施において、仏教的要素を持ち込んでいたことを指摘し、それらは同疏の符讖の真実性を裏付けるための行為でもあったことを明らかにした。

（２）則天武后が高宗の皇后であった儀鳳年間、すでに政治の実権を握っていた彼女は、長安の光宅坊で感得された仏舎利の全国への頒布に関与し、かつ主導したと考えられる。同事業に関しては、全国規模で実施されたにもかかわらず、現存する関連史料がきわめて乏しい。しかし、西安碑林博物館所蔵の開元十二年「仏堂銘幷序」もまた、儀鳳年間の舎利頒布事業を裏付ける史料とみられることを指摘した。さらに、敦煌写本『大雲経疏』S.2658 と S.6502 において、則天武后が八百四万舎利塔を造立せんと発願し、長安光宅坊で感得した舎利を四天下に頒布したと記すこと、阿育王が転輪聖王のうち最も位の低い鉄輪王と見做されていたことに着目し、武后のこの発願内容は自身が阿育王を凌駕する存在であるとの意識にもとづくものであると論じた。

（３）儀鳳年間の仏舎利頒布は、皇帝が感得した仏舎利を全国に配るという一大仏教事業であった。ところが、同事業に関する史料の記載が乏しいこともあって、その実態に関する研究はほとんどなされてこなかった。しかし、潞州梵境寺「大唐聖帝感舎利之銘」を仔細に検討することにより、つぎのような結論を得た。すなわち、舎利頒賜の規模は、対象が諸州府と在京諸寺であり、その数は五百前後にのぼる。舎利頒賜の場は、当時「含元宮」と呼ばれた大明宮であり、舎利を頒賜したのは高宗で、舎利を受け取ったのは各州府から長安に集まっていた朝集使と考えられる。舎利頒賜時期の上限は、朝集使が京師に参集する期限からみて儀鳳二年十月二十五日、下限は朝集使が離京する同年三月末に置くことができる。さらに、隋文帝の仁寿年間の舎利塔建立と比較すると、仁寿年間の場合は諸州のうちの百十余州のみを対象とし、舎利を京師から各地に運ぶ任に当たったのは臨時に任じられた「勅使沙門」であったのに対し、儀鳳年間は支配下の全領域に隈なく実施したもので、しかも舎利の運搬を担ったのは朝集使という、経常的に機能している既存の行政システムを用いていたところに大きな特徴が見出せる。これにより、則天武后は仏教事業を政治と一体化して実施していたことを指摘できた。

（４）棺槨形舎利容器と則天武后との関係について、その創始と普及の両面において検討した。まず創始に関しては、文献上の初見にあたる『集神州三宝感通録』の記事には、則天武后が顕慶五年に法門寺真身舎利のために造らせた九重の「金棺銀槨」が、棺槨形舎利容器の創始であるとは書いていない。しかし、記事を仔細に検討すると、その蓋然性が極めて高いだけでなく、かつ法門寺舎利が通常の粒状ではなく筒状であったことも、棺槨形舎利容器の着想の背景にあったと考えられる。さらに、この問題に付随して、以下のような興味深い結論を導き出すことができた。まず、法門寺真身舎利を納める容器を制作するために、則天武后が布施したのは銭帛ではなく自身が寝臥していた衣帳であった。これは霊骨として尊崇される法門寺の真身舎利と自己とを重ねんとする意図によるものとみることができる。また、現存する四件の法門寺舎利のうち、真身舎利は第三舎利であり、その根拠は第三舎利を容れる銀函の銘と「大唐咸通啓送岐陽真身誌文」に求めることができる。さらに、このことによって、第三舎利を納めていた玉棺と水晶槨は、則天武后が顕慶五年に作らせた九重の金棺銀槨の一部であったとみられることを明らかにした。

（５）棺槨形舎利容器の普及にも、則天武后が決定的な役割を果たしていたことを、儀鳳年間の舎利頒布との関係から読み解いた。すなわち、潞州梵境寺「大唐聖帝感舎利之銘」には、舎利を収めた容器について「槨を畳ね金を鎔き」との記載があり、そこから儀鳳年間の舎利頒布において用いられた舎利容器が、棺槨形式を含む多重構造のものであったと読み取ることができる。儀鳳年間の舎利頒布の実施範囲は直接統治下の各州に及ぶという、広範で包括的なものであったから、この一大事業が棺槨形舎利容器の全国的普及の契機となったと考えられる。のみならず、これまで棺槨形舎利容器に関する最古の文献記録と現存最古の遺物との間には三十数年の空白期間があったが、儀鳳年間の舎利頒布は、ちょうどその空白を埋める歴史的意義をも有している。したがって、棺槨形舎利容器もまた、則天武后が仏教美術や仏教文化に与えた影響の一つであることを明確にすることができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計12件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　5件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 大西磨希子	４．巻 87
２．論文標題 衆生はどこにいるか―唐代仏教美術における空間認識と表現形式―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 日本仏教学会年報	６．最初と最後の頁 134-160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大西磨希子	４．巻 65-1
２．論文標題 則天武后による棺槨形舎利容器の創始と流布―法門寺真身舎利の金棺銀槨と儀鳳年間の舎利頒布	５．発行年 2023年
３．雑誌名 仏教史学研究	６．最初と最後の頁 3-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大西磨希子撰、康昊譯	４．巻 26
２．論文標題 武則天的明堂與嵩山封禪―以《大雲經疏》S.6502為中心	５．発行年 2023年
３．雑誌名 域外漢籍研究集刊	６．最初と最後の頁 381-401
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 大西磨希子著訳、李孝峰訳	４．巻 8
２．論文標題 綴織當麻曼荼羅與唐王朝―敦煌發現的宮廷寫經與諸州官寺制度	５．発行年 2022年
３．雑誌名 絲綢之路研究集刊	６．最初と最後の頁 223-239
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大西磨希子	4．巻 24
2．論文標題 儀鳳年間の舎利頒布	5．発行年 2021年
3．雑誌名 唐代史研究	6．最初と最後の頁 3-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大西磨希子	4．巻 37
2．論文標題 武則天與阿育王――儀鳳年間舍利頒布與《大雲經疏》	5．発行年 2021年
3．雑誌名 古今論衡	6．最初と最後の頁 57-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 大西磨希子	4．巻 16
2．論文標題 五月一日経『宝雨経』補正――書写次第の再検討	5．発行年 2022年
3．雑誌名 敦煌写本研究年報	6．最初と最後の頁 16-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大西磨希子	4．巻 1511
2．論文標題 禅林寺本當麻曼荼羅	5．発行年 2021年
3．雑誌名 国華	6．最初と最後の頁 54-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大西磨希子	４．巻 15
２．論文標題 棺槨形制舎利容器的伝播与武則天	５．発行年 2020年
３．雑誌名 形象史学	６．最初と最後の頁 51-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 大西磨希子	４．巻 5
２．論文標題 初唐時期西方浄土変与《観無量寿経》	５．発行年 2020年
３．雑誌名 絲綢之路研究集刊	６．最初と最後の頁 195-223
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 大西磨希子	４．巻 0
２．論文標題 則天武后の明堂と嵩山封禅――『大雲経疏』Ｓ六五〇二を中心に――	５．発行年 2020年
３．雑誌名 氣賀澤保規編『隋唐洛陽と東アジア：洛陽学の新地平』法藏館	６．最初と最後の頁 279-305
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 大西磨希子	４．巻 14
２．論文標題 則天武后と阿育王――儀鳳年間の舎利頒布と『大雲經疏』をめぐって	５．発行年 2020年
３．雑誌名 敦煌写本研究年報	６．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　0件／うち国際学会　7件）

1．発表者名 大西磨希子
2．発表標題 衆生はどこにいるか―唐代仏教美術における空間認識と表現―
3．学会等名 日本佛教学会第91回（2022年度）学術大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 大西磨希子
2．発表標題 棺槨形舎利容器と則天武后―金棺銀槨の創始と流布―
3．学会等名 仏教史学会学術大会大会シンポジウム
4．発表年 2022年

1．発表者名 大西磨希子
2．発表標題 五月一日経『宝雨経』補正――　書写次第の再検討――
3．学会等名 2021年中国中世写本研究夏季大会（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 大西磨希子
2．発表標題 佛教藝術與世俗統治――敦煌彌勒變相的演變與武則天
3．学会等名 「東亞文獻與文學中的佛教世界」學術研討會　「東亞佛教藝術史」分科會（国際学会）
4．発表年 2021年

１．発表者名 大西磨希子
２．発表標題 「見える」浄土を「観る」――唐代西方浄土変と道綽
３．学会等名 「見えるもの」や「見えないもの」に関わる 東アジアの文化や芸術についての学際的な研究　2020年度第1回研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 大西磨希子
２．発表標題 唐代西方浄土変と道綽
３．学会等名 『安楽集』に関する公開研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 大西磨希子
２．発表標題 儀鳳年間の舎利頒賜 ――則天武后の仏教事業に関する一考察
３．学会等名 2020 年度 唐代史研究会 秋期シンポジウム
４．発表年 2020年

１．発表者名 大西磨希子
２．発表標題 武則天的舎利信仰與《大雲經疏》
３．学会等名 International Conference on Dunhuang Studies, Cambridge 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 大西磨希子
２．発表標題 則天武后の舍利頒布とその意義
３．学会等名 2019年中國中世寫本研究夏季大會（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 大西磨希子
２．発表標題 武則天的舍利頒布與《大雲經疏》
３．学会等名 第13屆通俗文學與雅正文學--文學與信仰國際學術研討會（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 大西磨希子
２．発表標題 金棺銀槨形制舍利容器的傳播
３．学会等名 形象史学与燕趙文化国際学術研討会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 大西磨希子
２．発表標題 金棺銀槨形制舍利容器與武則天
３．学会等名 漢學與東亞文化國際學術研討會（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

佛教大学研究活動報manako「敦煌莫高窟の仏教壁画に武則天の影響を見出す。」 https://bukkyo-u-research.jp/research/research10/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関